

サロ

出 会 い ふ れ あ い 助 け 合 い

ン

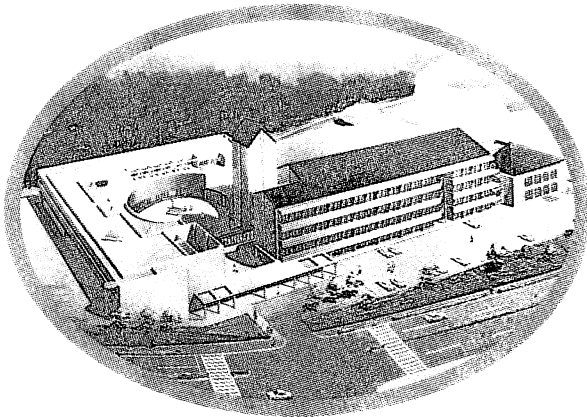
あべの

NO.73

障害者と就労 Part II

大阪ワークセンター 大阪障害者職業訓練校

見学会



大阪障害者職業訓練校 全景

サロン・あべの六月の出会い

サロン・あべのの六月の出会いは、大阪ワークセンターと、大阪障害者職業訓練校という、二つの障害者のための職業訓練施設を見学した。

平成四年六月二十日(土)、天候は曇り。集合場所にしては、大阪市身体障害者スポーツセンターには、九時半頃から続々と参加者の方々が集まって来られた。今回の見学会には、リフト付きバスのあゆみ二号

ともう一台、いつもサロン紙の印刷でお世話になってる、セルフ社のリフト付きワゴン車をお借りした。予定の時刻より少し遅れたが、十時十分、最初の見学地である、大阪障害者職業訓練校に向けて出発した。途中、交通量が多く心配したが、予定どおり十一時に訓練校に到着した。

大阪障害者職業訓練校

五月の出会いで講師をしていただいた、山田先生に出迎えていただき、まず、二階の多目的室へ。ここで筆野氏より、概略説明をしていただいた。

平成四年四月に新築移転されたばかり。国が設置し、運営は大阪府が行っている。

訓練科目は、精神薄弱者を対象とした、

「作業実務」と、身体障害者を対象とした、

「情報処理」、「第1メカトロ技術」、

「第2メカトロ技術」、「OAビジネス」、

「製版アート」、「アパレル」、「彫型システム」の計八科目。訓練期間は、情報処

理と第1メカトロ技術が二年、その他は一年である。定員は百六十人。訓練時間は朝

九時十分から夕方十六時二十五分まで。

百二十名収容できる寮があり、現在は五十

百二十名収容できる寮があり、現在は五十

五名がここで生活している。訓練科目、建物・設備などが新しくなったことで、入校希望者が増え、競争率が上がっている。

そのあと、二つの班に分かれて、実際に施設を案内していただいた。

ほとんどの科目が、パソコンや、その他のハイテク機器を導入するなど、時代の流れに乗った、素晴らしい設備と内容であった。ゆったりとした室内空間と共に、申し分のない訓練環境のように思われた。また、寮の設備もこれまでとは比べようもなく、快適な生活が保障されていた。きつと来年あたりは、この噂を聞いて、全国からの入校希望者が殺到するのではないか、そんなことを思ってしまった。

訓練校の見学が終わったあとは、すぐ隣りのファインプラザ大阪におじゃまをし、そのラウンジをお借りして昼食をいただいた。そのあと、もう一度バスに乗り、次の見学地である、大阪ワークセンターへと向かった。

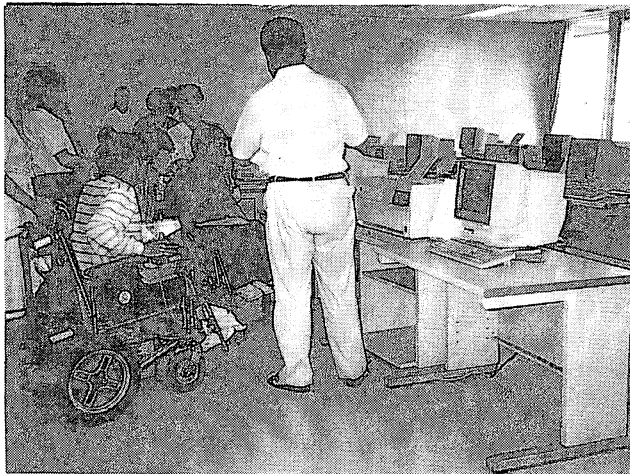
大阪ワークセンター

ここでも、新田氏よりの概要説明の後、二班に分かれて見学をさせていただいた。

最後にもう一度、質問の時間も設けていただき、コーヒーまでごちそうになってしまった。

平成二年四月一日、大阪身体障害者団体連合会によって設置された施設である。入所・通所共に、身体障害者手帳をもち、十八歳以上で、就労意欲があり、日常生活や、集団行動に支障をきたさない者が対象となる。訓練期間は、原則として三年。

授業科目は、会議録の作成を行う「録音・ワープロ科」、名刺・チラシ・ポスター等



コンピューターがならぶ最新設備の教室
(大阪障害者職業訓練校)

の印刷を行う「印刷科」、機械クロコでの大量生産と手作りで行う「陶芸科」、スクリーン印刷・その他手作業を行う「手工芸科」、軽作業を行う「簡易作業科」がある。現在、定員は五十六名。福祉事務所が、その窓口である。訓練は、企業などから受注した仕事をこなすなかで行われており、利益が上がればすべて訓練生に還元される。

まるで各科目が、それぞれ小さな会社のようにであり、土曜日で実際の訓練風景は見られなかったものの、とても温かい、家族的なものが感じられた。

もちろん、寮の設備もあり、生活はすべて訓練生の自主性に委ねられている。お酒も自由であり、自分の家として生活できるようになっている。

多少のハプニングはあったものの、まずまずの見学会であったと思う。訓練校のみなさん。ワークセンターの方々。昼食にだけ立ち寄る形になった、ファインプラザのみなさん。バスとワゴン車の運転手の方。本当にお世話になり、ありがとうございます。

参加者は三十名。まとめ 上平幸雄。

六月の出会いに寄せて

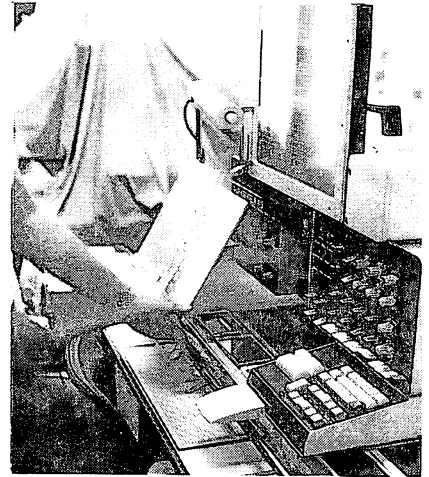
前田 裕子

朝日新聞で、「サロン・あべの」のことを知り、冨田さんに連絡をして、五月の出会いに参加させていただき、大阪障害者職業訓練校についていろいろと知ることが出来ました。と、同時に「サロン・あべの」の皆様の明るさと、職業訓練校の山田隆司氏のお人柄の温かさに引かれて、六月二〇日の見学会にも、お邪魔になるとは思いながらも同行させていただきました。

大阪障害者職業訓練校と、ワークセンターを見学して、健常者の目で見えた感想を述べさせていただきます。

今年の四月に建て替えられて開校したというだけあって、職業訓練校は建物も設備も大変立派で、障害を持つ人のために細かい配慮がされていると感じました。

部屋も廊下もゆったりとしたスペースで、車イスに乗った方や、目の不自由な方も安心して生活や学習をしておられるのだろう



実務的な中になごやかな雰囲気のある作業室 (大阪ワークセンター)

と思います。

ワークセンターに行ってみて、「先にごちらを見学した方が良かったね」と冗談を言う程、先に見学した職業訓練校とは、設備の面で大きな差があると思いました。

国立の施設と、民間の施設との差なのでしょうか。ワークセンターの作業室は、物が雑然と置かれていて、障害のある方が安心して作業ができるのだろうかと思ってしまうました。

どちらも、障害の種類がいろいろある中で症状が固定していて、自分で身辺処理ができることが条件であること、定員が少ないこと、交通の便が悪いこと等が、今回の見学会で特に気になったところです。

大阪市内の交通の便が良いところに、障害者のための職業訓練校や施設がたくさんあれば、健常者との交流ももっと活発になるのにと思うと残念です。

障害を持つ人も、健常者も、対等につき合い、共に生活するということが、当然のことであるという考えに立って、初めて社会福祉の理念が本当に生かせるのだと思います。

盲人の職業と音声ワープロ機器

柿岡 忠

六月二〇日、「サロン・あべの」より堺市城山台の国立府営の障害者職業訓練校と和泉市の大阪身体障害者連合会の大阪ワークセンターの見学に参加しました。

私は、視力障害者の立場から、盲人の職業がどのように成されているか見たいと思っていました。

平成二年四月ワークセンター開設より、音声のワープロを使って、会議等が録音されたものを漢字の文章に更生して、議事録を作成する高度の技術と伺いました。これにより、盲人が人手を借りずに記録文書を作ることが出来るようになりました。

見学は土曜日の午後でしたので、お仕事をりは残念ながら拝見出来ませんでした。

これまで、視力障害者は、職業選択の自由が無く、僅かハリ・マッサージ等、限られたもので、それも近年は健常者が進出し、増々狭められている現状です。

文章作成も以前は、録音された言葉をカナタイプに直し、それを普通文書に書き替

えのお願いをしていました。

訓練校で見学したメカトロニクスは、洋裁の型紙も、デザインも、手工芸すべてが機会で作れる等、すばらしいことばかりでした。

恵まれた環境の中で、ハイテク技術を学ばれている方々が、健常者に劣らぬ技能を研鑽取得されることを、祈って帰路につきました。

訓練校の思い出

中西利香

六月二〇日に、「サロン・あべの」の皆さんと光明池にある大阪障害者職業訓練校へ見学に行きました。

外から見て四階建て、中に入ってまたまたびっくり、とっても広くて、仕事がやりやすそうで、豪華になって、これが訓練校かと思いました。

私は、七年前に堺市旭ヶ丘にあった、旧訓練校を卒校しました。今と違っていろいろな科目がありました。例えば、デザイン科、洋裁科、技師装具科、園芸科などです。

私の場合は、父親と一緒に花屋さんをずる為に、一年間園芸科で勉強をしました。

花の名前、花の種類、花の病気、花の剪定、植木の植え替えもできるようにになりました。

思い出になりますけれど、私は実習時間のときに沢山の失敗をしました。その中でも、とくに忘れられないことがあります。ハイビスカスの木の枝を切って挿えようとして、初めはおそるおそる切っていたのですが、あちらこちらと枝を取っていくうちに、気がつくとう丸坊主になっていました。

その時の驚いたこと、先生にすごく怒られて辛かったことは、今でもはっきり思い出します。

思い出はまだまだありますが、また機会があったら書くことにします。

訓練校の時は、私にとって夢と希望にあふれた短い一年でした。

「二十歳の頃」

上平 幸雄

大学に行きたくて、高校卒業後二年間も

浪人しましたが結局は断念。大学に行かないなら、当然就職するのが普通ですが、障害者を雇ってくれる会社など、そう簡単にはありませんでした。それでも、経理事務なら高校での勉強のように、机に向かったままでもできる仕事だと思い、単純に、まず簿記の資格を取ろうと考えました。

簿記の通信教育を受けようと準備していた、そんなときに、知人から大阪身体障害者職業訓練校のことを知らされました。ちょうど経理事務科というのがあって、簿記の資格が取れるとか、訓練手当がもらえるとか、いろいろなことを聞きました。その中で、ぼくを一番ひきつけたのは、訓練校に行きながら自動車の運転免許を取る人が多いという話でした。運転免許を取って、自分で自動車を運転するなんて、これまでは考えたこともなく、また、自分にはできないと思っていたのです。しかし、知人の話を聞くうちに、もしかしたら自分にもできるかもしれないと考え始めたのです。

この知人のおかげで、大阪身体障害者職業訓練校の経理事務科に入れていただいたのが、昭和五十三年の四月。まだ、二十歳

でした。

実際に訓練校に入ってみて驚いたのは、その年齢の幅広さです。下は中学を卒業したばかりの十五歳から、上は五十ぐらいの人までいたと思います。それに、当たり前ですが、まわりは障害者ばかりです。脳性マヒやポリオはもちろん、事故や脳いっ血の後遺症など、実に様々な原因があるということや、その障害程度も部位も、人それぞれに違うことを知りました。それまでは、一般の高校に通っていましたが、自分自身が障害者であることすら、ほとんど意識せずに生きてきたのです。「えらいところに来てしまった。」というのが正直な気持ちでした。後になって人から聞いたのですが、当時のぼくは、生きているのが不思議なくらいに、暗かったそうです。

そんなぼくも、同じ教室で勉強する仲間達のおかげで、少しずつ心を開いていきました。勉強そのものは、あまりしませんでした。遊びの方はよくやりました。寮に入っていたこともあり、毎晩のように、喫茶店やスナックに通いました。酒もたばこも、この頃が初めてでした。車椅子ですが、

それなりの自由を初めて経験したのです。

簿記の資格も、日商の二級、全商の一級まで取りました。和文タイプライターやそろばんも教わりました。念願の運転免許もいろいろな人の協力のおかげで、取ることができました。修了時には、知事賞までいただき、たった一年でしたが、本当に充実した、実りの多い一年でした。

今は大阪府の職員として仕事をし、「サロン・あべの」の活動など、障害者問題にも目を向けていますが、あの訓練校での一年が、現在のぼくの、すべての原点になっているような気がします。名称も、場所ももちろん建物も、科目も、カリキュラムもすべて変わってしまった訓練校ですが、ぼくにとっては、高校での三年間よりも、はるかに多くのことを学ばせていただいた、母校なのです。

思い出の訓練校

南光仁子

6月のサロンの集いで職業訓練校とワー

クセンターへの見学会に参加させて貰い、十年ぐらい前の私が思い出されてきた。

今年の4月に訓練校は堺市から和泉市に移転し、とっても素晴らしい建物に変身していた。新しい訓練校を見た瞬間、私は思わず「ワーすごい」と声が出た。

と言うのは私が入校していた十年ほど昔の話だが建物は言う迄も無く古く、女子寮に入っていたのだが四人部屋で夏には扇風機が一台しか無く、それはもう堪らない暑さでここで我慢が出来たらこれから先どんな暑さにも耐えていけると自分に言い聞かせていた。

授業は軽印刷科でおもに和文タイプと印刷の勉強だったが、タイプの活字の持ち運びなんかは重たくて色々苦心惨憺なものだった。今はどの科の教室も広々としていて最新の機械が揃っている。きつと寮の設備も、冷暖房は勿論の事随分と快適に過ごせるに違いないと思う。見学した感じでは、とても素晴らしいものを感じられた。

私は二十数年もの昔から、家庭からの自立の第一歩として訓練校に入りたいと考えていた。ところが車椅子で重度のうえ無就学だった為あきらめざるを得なかったのである。その当時は職業訓練所と聞いていて軽

度障害者の方がほとんどだった。元は戦後まもなくに傷痍軍人の職業訓練のために建てられたもので、車椅子を使う重度障害者が入校するなど考えもしなかっただろう。設備面でも入校は難しかったと思う。

それから十数年経ち、設備改善もあり私自身もそのころには高校卒業資格を得ていたので昔の夢ももう一度とチャレンジし、訓練校生として一年を過ごす事になった。

前半は寮生活や勉強の事その他辛い事も多く有ったのですが、その内友達も出来段々楽しい日々が多くなってきた。なかでも四、五人の友達と仲が良くファミリー的で必ずと言っていいぐらい一日の訓練が終わると近くの喫茶店で一日の出来事を語り合ったり休みの日にはドライブとかショットピング何かもあり自由に出来てなかなか楽しんで過ごせてた様に思っている。

私にとっては新しい設備の整っている今の訓練校ではなくて、不十分な環境のなかで、勉強に生活に苦労し、また暑い日、寒い日を通り過ぎて来たからこそ現在の生活があり、これから先もその頃の一年を楽しんでいる思い出に換えて持っていけると思っている。

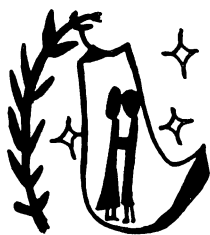
これは余談ですが、訓練校を出て就職は

出来無かったけれどもいまの主人と再会出来て、訓練手当ての貯金は後に結婚資金に変身。見事、永久就職となって今は貧しいけれど二人仲良く暮らしていると言う訳である。

新訓練校を見学した後もう一つの見学の場ワークセンターへと向かった。ここは重度障害者の職場と言った感じで主に印刷、陶芸、軽作業、などをしていて建物も小ぢんまりと落ちついた感じで、何故かホッとさせてくれるそんな気がした。そんな時、私に夫が言った。

「僕には訓練校よりここの方がおおてるワ、ほんまの職場って感じヤ」

長年小さな印刷屋セルフ社で働いていた夫の感想なのだ。さて皆様方は今回の見学の感想はどの様に持たれたのでしょうか？



真夏日になった五月二十四日(日)の午後「ウイル作業所」大阪府住吉区大領五十一十六」を訪問しました。

JR阪和線長居駅より、西南へ歩いて十五分程の静かな住宅地の一角に、ワンルーム形式に改造された「ウイル作業所」がありました。

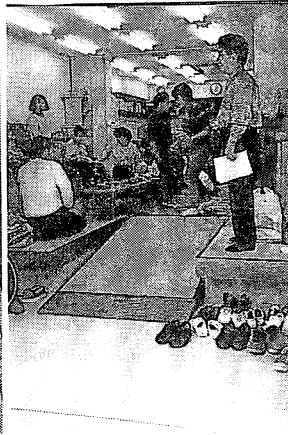
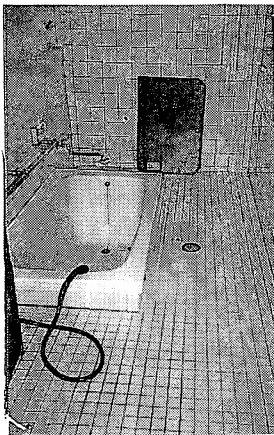
間口一杯に開かれた入口を入ると、右手側の土間続きに台所場があり、居間の床に腰を掛けたまま、炊事が出来たり、又、その間を埋めるための床几が用意されていて、座ってまゝ炊事ができたりと、各々の障害に合わせて使い易い配慮がされていました。

玄関の左手隅には、広い洋式トイレがありました。このトイレは、土間からでも居間からでも使用出来るように二つの出入口があり、可動自在の蓋式の床が洋式トイレの周りに設置出来るようになっていて、居間から這ってでも行けるように工夫されていました。

居間は、車イスの座席の高さと同じで、乗り降りが楽になっていました。が、この居間の一番ユニークだと感じましたのは、居間中央の床の一部がスロープになり、車イスのまゝ居間に上れることでした。

ウイル作業所見学

5月24日



さまざまに工夫された室内

洗面所やお風呂場も、低い位置に設置されており、床に座ったままの姿勢で使えるようになっていました。浴槽は一番大きい型で、その周囲三方から入れるようになっていました。これは、介助する方される方には使い易い広さだと思いました。

障害に合わせて使用出来るように色々工夫された広々としたお部屋には、パソコンや、コピー、リソグラフ等の設備が整えられていて、若々しい「ウイル作業所」の仲間達の意気込みを熱く感じました。

この「ウイル作業所」は、今までの「施設障害者外出サービス」活動を中心にして、重度障害者の「自立に向けた仲間づくりの場」として、生活教室(料理、座談会)、生活介護(個人的な外出やお風呂介護等)と介護調整にたずさわると共に、お茶販売等の活動も進めていかれるとのことでした。

施設と地域の橋渡し役をされていく中から、障害者の自立へのステップを一步一步進めて来られた実績が、言葉の端々、部屋の諸設備から感じることが出来ました。

今後の活動に期待を抱きつつ、メンバー方との和やかな歓談に思いを残して帰途に帰りました。この日の参加者は六名でした。

生まれたばかりの君へ

昨日うまれたばかりの君が、眉をひそめて、君のお父さんやお母さんを見つめている様は、優しさと笑顔でいっぱい二人の姿が背景となり、ぼくにどんなにか多くのことを語ってくれただろう。

君の身体がお母さんの中から出てくるそのときに、そばにいてお母さんを励まし身体を支えていた君のお父さんは、ぼくよりも何歳か若いのだが、君のあらわれによって、ぼくよりもずいぶん賢くなつてしまつた。「世界が変わつた」とつぶやく君のお父さんは、ぼくの再三の質問にもかかわらず世界がどう変わったのか、ついに教えてはくれなかつた。ぼくが知つたのは、言葉にできないほどの深く大きなものを君が君の父さんに与えたということだけだ。

まだお乳の出ない君の母さんは、こわれそうな君の身体を抱いて哺乳瓶を傾けている。その口びるから自然にも

れてくる言葉を、遠い昔、君の母さんがいまの君の何倍かの大きさしかなかつたころ、ぼくはたしかに耳にしたことがある。忘れてはいけない。君の母さんは、そんな小さいころから君を待っていたのだ。小さな妹の、そんな歌を、少年だつたぼくは不注意にも聞きのがしていた。

君の柔らかな髪を指先で撫でながら「なんだか迷惑しているつていう顔をしているな」と君の父さんは笑つていたが、君は君の知性で生まれてきたこととの重さを考えているのだ。気難しい哲学者のように思索する君と、祝福を与えつづけている君のふた親との間には、もうその点ですでに深い不調和があるのだが、そこにキリスト誕生の絵のような調和を見てしまうのは、ぼくもまた君の世界の側の人間ではないということだろう。

君はいま、おそらく君の母さんさえ知らない誰かと、ぼくたちがまだ知ら

ない言葉で生きる意味やこの世界について語りあつていいる。しかし語りあう仲間も見えなくなり、語りあうすべも忘れたころ、君には何もかも思うようにならないもどかしさを感じる日々が続く。それは長く孤独な失望の日々がちがいない。

しかし、その嵐の時期がすぎれば、生きる痛みは鈍くなり耐えられるようになるだろう。そして希望をもちはじめ。君の父さんや母さんは、その希望をもつたからこそ、君を産むことを決意した。

眉をひそめた君の凛々しくも憂いさえ秘めた眼を見ていると、君の父さんや母さんには内緒だが、産まれたことが苦悩の始まりだという古代インドの哲学者の言葉を思い出す。だが、そうではないということをお示してほしい。そのような悲しい思想に対して、そうではない、そうではないと力強く否みつづけることが、この世界で希望をもつということに他ならない。長い間、母さんの身体のなかにいた君には窓の光がまぶしいかもしれないが、しかし、その光の中にこそ、ぼくたちの希望はあるのだ。

(知)

美智子のこんな話



岸田 美智子

三回目でやっといいい湯だなあ

四月に新しい作業所に引越してきて、広くて使いやすいお風呂ができたのですが、介助の必要な私のような障害者が入っていませんでした。でも、この六月からは、介助者二人と私の三人で週に一回ぐらい入っていただけるような体制をつくることになりました。今までに合計三回ぐらい入ることができました。

一回目はとても不安だったので、もう六年ぐらい私のお風呂介助を自宅一人でやっている介助者Mさんに作業所に来てもらって四人で入ることになりました。二人の新しい介助者の方々に色々覚えてもらって

私の不安を少しでもなくそうと思いました。色々な生活介助の中でもお風呂介助は石鹸と水を使うので滑って危ないし、体力がいるのでなかなか難しいので在宅障害者や自立障害者も困っていたり、施設では職員の手がなくて、一週間に一回になったり、芋洗いの三分間で終わったりする厳しい現実があります。

まず、一回目はお風呂の湯沸し器やシャワーのマイコン装置が使いこなせなかったり、私の体をどこから洗うとか、注意して洗う部分や体の持ち上げ方などがぜんぜん分からないし、介助者も不安があり、入った気分になれませんでした。

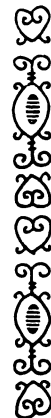
それに、最後にお風呂場から上がる時に介助者と一緒にはっきり返り、私は大丈夫だったけど、新しい介助者のKさんが足にアザを作ってしまった。そして二回目は、新しい介助者のKさんとYさんだけでやってみました。今度はかなりうまくいったのですが、耳に水が入ったり、シャワーが熱すぎてびっくりしたりして、けっこうスリリングでした。

三回目でやっとな私の体の機能の必殺ワザ(足でお湯をまぜたり、ヒザ立ちを一人でしてしまったり)を介助者が発見して喜ば

れたりして、結構余裕ができて、やっといいい湯だなという感じでした。

これからは、お風呂介助に慣れている介助者を一人でも多く作っていき、近所の銭湯などにも挑戦してみたいなあと思つていきます。

重度障害者が地域で暮らすためにも一歩ずつやっついていきたいと思います。



∞ サロン・あべの紙の

朗読テープが出来ました ∞

山本敏子さんのご協力で、サロン・あべの紙七二号の録音テープが出来ました。

バックナンバーは三九号から、七一号の分があります。五〇号は五周年記念紙になっており、九〇分と六〇分の二本のテープに収録されています。

サロン紙朗読テープをご希望の方には、ダビングをしますので、富田までお申し出下さい。(☎〇六一六九一一〇二八)

ナンペイの

ひとつとふたこと

23

なんとかしてえくな 車椅子住宅

やっぱり、今年もだめだった。

何のことかといえば、私たち夫婦がここ数年来「安住の地」ならぬ「安住の家」を求めて毎年申し込んでいる、大阪市営の車椅子住宅の抽選のことである。

大阪府営の車椅子住宅の場合だと、一年に何回か募集もあり抽選に外れたとしても落選回数によっていくらかの優先権が与えられるそうで、根気よく申し込んでいけば、いつかは当たる仕組みのようだ。(自分の気に入ったところへ入ろうと思えばそうもうまくいかないようだ。)

ところが、大阪市営の車椅子住宅となると募集も抽選も一年に一回だけ。おまけに何度落選しても優先権など何もなく、毎年毎年文字通り「一からの出直し」となるわけだ。抽選方法も、商店街の大売出しなんかで見かける六角形のようなものをガラ

ガラッと回して、飛び出してきた小さい球に書かれている番号が申し込んだ人の番号と同じなら当選、という公正なやり方だから「運を天に任す」以外ないのである。

倍率も、募集するほとんどの所が二桁という場合が多く、スーパーの記念セールかなにかのときに一度だけ「二等賞」の洗剤が当たっただけという、くじ運が皆無に等しい私たちにとって当選するなど「夢のまた夢」と思えてくる倍率のときもある。

もちろん、交通などの不便さを抜きにして考えていけばさほどの競争率を突破しなくてもいい所もあるのだが、まさかずっと家のなかだけで生活しているわけにも行かず倍率のことを気にしながらも便利な場所を選んで申し込むことになる。

こんな事では、いつになったら車椅子住宅に住めるか分からない。せめて何度落選

したかで優先権が与えられるような具合にはならないものか、と落選通知のながきが送られてくるたびに思うのだが、車椅子住宅の絶対数が足りないことが根本的な問題のようでそれも当然無理のようだ。

もちろん、一般の人達の住宅難を考えるとき勝手な言い方になるのかもしれないが、できるならこれから建てる市営住宅には一棟に一戸は必ず車椅子住宅をつくるようにならないだろうか。それが無理だとしても、特に「車椅子用特別設計住宅」ではなくてかまわないから、「車椅子でも暮らせるようなゆったりとしたスペースのある市営住宅」をあちこちにつくる、といった新しい発想を行政側にも持ってもらえないだろうか。

また、屋根裏で同居人のネズミたちが運動会を始めたようだ。大屋さんからの立ち退きの要求の声ももうすぐ聞こえてきそうな雰囲気である。

「なんとかしてえくなあ」

切実にそう叫びたい、今日この頃である。

南光龍平

「おもしろい 姉ちゃん」

田 淵 美登利

ハサミを持つ自由

こんごう寮の人達には、出来るだけ心地良い生活をしてもらいたいと思うものの、職員としては第一に「安全」を考えて、多少の不自由を強いてしまうことがあります。色々あって、一部の寮生さんのハサミを職員が管理することになった時のことです。誰もが、おそらくよく意味もわからないままハサミを出してくれたのですが、一人の女性が「ハサミが自分で持てなかったら、好きな時間に刺繍が出来へんやん」と怒ったのです。何でも理由をつけて職員に自分の様々な不安をぶつける人なので、言葉と心は多少違うかもしれないのですが、「なるほど」と関心して聞いてしまいました。結局、数日後、先の丸い安全なハサミを配ることで解決したのですが、普段自分の権利を主張出来ない人達の権利を守っていくということは、とても大変なことなんだと、今さらに知らされました。

浅香山病院デイ・ケア施設見学

あべのボランティア・ビューローの「ボランティアの集い」グループによる見学会が、浅香山病院（堺市今池町三三三三十六）のデイ・ケア施設で、六月九日（火）午後二時より行われました。

大正十一年に堺脳病院として創設された当院は、その後拡張をかさねて昭和十五年に風見の塔があるヨーロッパ風のハイカラな鉄筋建築の精神病院となりました。そのモダンな塔は今も建築学的に貴重な建物として残っており、その下の一部分では、精神科の患者さん方のサロン等に使用されてきました。現在は、精神病院だけでなく、近代設備の整った一般総合病院として、地域医療の一端を担っています。

精神科にソーシャルワーカーが置かれたのは、昭和三〇年初め。ボランティアが入って、患者さん方にお茶・お花を教えたりコースを楽しむようになったのが、昭和五二年。翌年には患者さん方と一緒に売店や喫茶室が開設されて、患者さんの憩いの場のサロンとなりました。又、患者さんの働く場所（チケット売り、料理人、ウェイタ

ー、ウェイトレス等）にもなっています。この他にも売店、図書室（古本も持ち寄り、患者さん達の手で運営されています）。

このような作業療法（OT）は、リハビリテーションの一つで症状の軽い人や退院された方が通ってきて色々な活動に参加されています。この他にも個人的に陶芸・革細工・絵画・音楽等が出来たり、グループで出来る園芸・スポーツ（ソフトボール、テニス・卓球等）・料理・新聞作り等があります。これらOT活動のプログラムは、医師・看護婦・ケースワーカー・作業療法士方が患者さんと相談しながら、その人に合わせてOTプログラムを組み、お手伝いと指導をしています。

これらの活動は、患者さん方の社会復帰に役立っていくとのことでした。

精神病院と聞くと、自分達とは隔離された存在のように感じていましたが、今回の見学で、院内の明るさ、患者さん方の積極的なOT活動にふれ、病いを克服していく姿勢に病名は関係ないと思いました。

又、ソフトボールをしている人、その試合を見ている車イスの痴呆症の老人の光景

は、とても身近に感じられて、「皆さんと同じ感性で接して欲しい」と言われた言葉が再び思い出され、しっかりと胸に刻んで緑ゆたかな浅香山病院を後にしました。

おしらせ

八月の出会い

日時 八月 二日(日) 一時～六時

内容 あべのカーニバルなんでも市で、

「さろん亭」の開催

場所 大阪市阿倍野区文の里1-1-40

阿倍野区役所裏

府立工芸高校グラウンド内

*「さろん亭」は、皆様よりご寄贈いただいた品物を、バザー販売して「サロン・あべの」の運営資金を得ると共に、地域の方々との広い出合いを希って、毎年なんでも市通りに開店しています。
家庭で眠っている品物(石鹸・タオル・シート・食器・雑貨・その他)がありましたら、ご協力お願い申し上げます。
又、当日のお手伝い及び、お買上げの方も、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

移転のお知らせ

あべのボランティア・ビューローが、七月十七日(金)に、阿倍野区役所「大阪市阿倍野区文の里1-1-40」の地下一階へ移転しました。

地域福祉に関することや、ボランティア関係のお問合わせ等は、今迄通り「月・水・金」の午前十時～午後五時です。
電話番号も変わりなく同じです。

☎(06) 1628-3334

尚、アルミの空き缶や、牛乳パックの収集は、元のあべのボランティア・ビューロー一室で、月曜日と金曜日の午後一時～四時に受け付けています。今後ともよろしく、ご利用下さい。

井 感謝 します 井

カンパ・切手・チケット・冊子・バザー用の品等ありがとうございます。
お礼を申し上げます。

六月のカンパ 金六、〇〇〇円

大島泰子、岩井 勉、柿岡 忠

笠原美和子、竹村定子、田中美智子、

西 和子、町野旬子、安井公子、

匿名様三名、

(敬称略)

さろん亭

まもなく開店!!

8月2日(日) あべのカーニバル

サロン・あべの
＜サロン・あべの＞運営委員会

編集後記

今号のサロン紙はたくさんの方から原稿をいただきました。これからもどしどしお願いします。紙面の都合で「Volunteer Center」はお休みしました。(は)

編集人；サロン・あべの運営委員会・＜サロン・あべの＞NO.73['92. 7.18 発行] 定価¥100。
代表；上平幸雄〒545 大阪市阿倍野区阪南町2-20-19-203 電話06-621-4365
連絡先；富田慶子〒545 大阪市阿倍野区阪南町6-3-26. 電話06-691-1028
表題；斉藤孝文・筆
印刷；セルフ社〒545 大阪市阿倍野区西田辺町2-2-10-101. TEL.06-691-2365.